

## 批判的合理主義とその展開

立 花 希 一

### I. 批判的合理主義

従来の哲学史では、認識論の2つの立場として、イギリスの経験主義（ベーコン、ロック、バークリー、ヒューム、ミルなどの認識論——その思想の一部は「論理実証主義」(Logical Positivism) が引き継いでいる——)と大陸の合理主義あるいは知性主義（デカルト、スピノザ、ライプニッツなどの認識論）とが対比されて、分類されている。

この2つの立場は、通常このように対立したものとして扱われているのに対し、ポパーは、根本において共通の誤謬を犯しているとして、両者を批判し、それに代わる認識論の立場を提出している。

ポパーによれば、「経験主義」と「合理主義」の双方にみられる共通の見解は、次の点にあるという。すなわち、われわれは真理に到達できるし、実際に到達しているのであるから、われわれの獲得している真なる知識は、何らかの根拠、源泉——「経験主義」によれば、その源泉は感覚経験であり、他方「合理主義」によれば「理性による自明な原理」であると主張される——に訴えることによって、正当化（証明、検証）できるという見解である。ポパーは、この見解を「正当化主義」(Justificationism) と名づける。<sup>(1)</sup>この正当化主義的な合理性の基準によれば、正当化しうる信念のみを受け容れることが合理的であり、正当化されない信念を受け容れることは非合理的であるということになる。

ポパーは、人間の知識——数学と論理学は除く<sup>(2)</sup>——を正当化する試みが実行不可能なことをいくつかの論拠を挙げて示している。それらを具体的に考察することにしよう。

まずポパーは、人間は誤りを犯しやすいものであるという、日常生活にお

ける人間の一般的性向を指摘する。「われわれはいつでも選択を誤まる——われわれはいつでも真理をとり逃したり、真理に届いていないことがある。確実性はわれわれ向きのものではない。われわれは誤りを犯しやすい<sup>(3)</sup>」と。

日常生活ではなるほどその通りだとしても人間知識の中でもっとも確実な知識と一般にみなされている科学的知識の場合にはどうなのか。ポパーは、科学についても同様のことをいう。「科学は人間のものであるから、科学は無謬ではない<sup>(4)</sup>」と。

ポパーは、科学理論の構造を言明間の論理的関係という観点から分析する。ポパーによれば、言明は大きく次の2つに分類されるという。普遍言明 (Universal Statements) と単称存在言明 (Singular Existential Statements) の2つである。<sup>(5)</sup>

科学理論は、自然法則を表現しようとするものであり、自然法則は、あらゆる時間、空間において普遍的に妥当する不変の規則性のことであるから、科学理論は普遍言明の形で定式化される。他方、基礎言明——科学理論をテストするために用いられる観察言明——は、単称存在言明の形で定式化される。

ポパーによれば、この2つの言明の論理的関係は次のようになっているという。普遍言明は、単称存在言明の連言からは演繹的に導出されえないが、単称存在言明と矛盾関係をもつことがあるというのである。この矛盾関係に着目し、ポパーは、科学理論と非科学的、形而上学的な理論を区別するための基準として、「反証可能性基準」 (Falsifiability Criterion) を提案したのである。<sup>(6)</sup>理論が科学的であるためには、反証可能でなければならない、すなわち、少なくとも1つの潜在的な反証者 (Potential Falsifier) ——理論と矛盾する少なくとも1つの基礎言明 (Basic Statement) ——が存在しなければならないという基準である。

科学理論は、検証 (Verification) ——真であることを立証——することは理論的に不可能であるけれども、基礎言明が真であると仮定するならば、理論を反証 (Falsification) ——偽であることを立証——することは論理的に可能なのである。すなわち、科学理論の真理問題が基礎言明の真理問題に還元されることになったのである。

それでは、基礎言明はその真理性を確定できるのであろうか。ポパーはここにおいても検証は不可能だと主張する。ポパーが、単称存在言明の検証不可能性を主張する理由は2つある。

(一)存在言明に含まれる普遍名辞 (Universal Terms) の問題。ポパーはいう。「あらゆる記述は普遍名辞(またはシンボル, または観念)を用いている。あらゆる言明は、理論の仮説の性格をもっている。「ここにグラス一杯の水がある」という言明は、どんな観察経験によっても検証されない。その理由は、その言明に現われている普遍名辞はどんな特殊な感覚経験とも結びつけられないということである。(「直接経験」はただ1度だけ「直接に与えられる」のであり、ユニークなものである) 例えば、「グラス」という語によってわれわれは、一定の準法則的振る舞いを示す物理的物体を指示するのであり、同じことは「水」という語にもあてはまる。普遍名辞は経験の集合に還元されえないし、「構成」されえない<sup>(7)</sup>と。すなわち、単称存在言明すら、「記述に内在する超越性<sup>(8)</sup>」のために検証不可能だということのである。

(二)心理学的、生物学的理論を用いて、ポパーは、確実な感覚所与 (Sense Data) の存在を否定する。<sup>(9)</sup>

いわゆる知覚の認識論的問題は、私の思うに、知識の基礎または源泉を観察に見出そうとする誤った企てにもとづいている。……感覚所与といったものはまったく存在しない。というのは、われわれはつねに理論を操作しているからであり、それらのあるものはわれわれの生理にさえ具現されているからである。そして感覚器官は理論に類似したものである。進化論的見解にしたがえば、感覚器官は現実の外的世界にわれわれ自身を適応させる企てにおいて発達する。科学理論は、われわれが身体外に発達させる器官であり、器官は、われわれが身体内に発達させる理論である。完全に非理論的で矯正しえない感覚所与といった観念が誤りである理由の1つがここにある。われわれは解釈の理論的要素から離れて観察することはけっしてできない。われわれはつねに解釈しているのである。つまり、われわれは、意識的、無意識的、または生理的水準において理論化しているのである。

したがって、単称存在言明の真理を確定する、修正の余地のない感覚経験は存在しないということのである。

かくして、普遍言明も単称存在言明もその真理を確定することはできないという結論に到達する。したがって、科学的知識においても、その真理性を

## 100 批判的合理主義とその展開（立花希一）

保証したり、正当化したりすることはできないということになる。

この結論は、正当化主義的な合理性の基準を受け容れている人々にとっては、非合理主義、懷疑主義に映るかもしれない。

「合理性」を正当化主義の主張するように、「われわれ人間は理性あるいは経験といった確実な根拠に訴えることによって知識を正当化でき、そうした手続きによって得られた知識のみを受け容れることが合理的である」という意味に解するならば、ポパーが示したように、それは実行不可能な提案であり、もしこれが合理性の基準だとするならば、われわれは非合理主義、懷疑主義に陥ってしまうことになろう。

それでは他に道はないのであろうか。われわれには正当化（証明、検証）の道は閉ざされているけれども、批判、反証の道は残されている、とポパーは主張する。ここにおいて、「批判的合理主義」（Critical Rationalism）が成立するのである。それによれば、われわれは誤謬を犯し、真理に到達できないが、誤謬という観念は、われわれが到達しそこなうかもしれない基準としての客観的真理という観念を含んでおり、しかも、われわれは真理に到達できないとしても批判を通じて真理に接近することができるというものである。

「合理性」を「批判的議論の結果、誤謬を誤謬として認めることが合理的である」という意味に解するならば、この提案は実行可能であり、われわれは合理主義者になれるであろう。批判的議論に耳を傾け、誤りから学ぶという「批判的合理主義」の態度は、科学の分野だけに限られるものではなく、日常生活にも、政治にも応用可能な、実践的意義をもった立場だといえるであろう。

## II. 批判的合理主義の展開

ポパーの「批判的合理主義」は、その後弟子たち——特に W. W. バートリ<sup>(10)</sup>——によって、さらに検討を加えられ、洗練されている。その展開を考察することにしよう。

これらの展開の出発点になっているのが、ポパーが「無批判的、包括的合

理主義」と対比させて、「批判的合理主義」を提唱した『開かれた社会とその敵』24章であるから、そこに見られる議論を検討することから始めることにしたい。

ポパーは、「無批判的、包括的合理主義」の立場を次のように定式化し、それに批判を加えている。<sup>(11)</sup>

無批判的また包括的合理主義は、「自分は論証または経験という手段で防御できないものはどんなものでも受け容れる用意がない」という人の態度として述べることができる。われわれはそれを原則の形にして、論理によってかまたは経験によって支持することのできない仮定はどんなものでも捨てるべきである、というように表現することもできる。さて、この無批判的な合理主義の原則が矛盾したものであることは容易にわかる。というのは、それが今度は論証や経験によって支持できない以上、それは、それ自身が捨てられるべきであるということを含意するからである（これは嘘つきのパラドックス、すなわち自分自身が偽であることを言明する文と類比的である）。それゆえ、無批判的合理主義は論理的に維持できない。そして、純粋に論理的な論証でこのことを示すことができるのであるから、無批判的合理主義は自らが選んだ武器、つまり論証によって打ち破られることになる。

このように「無批判的、包括的合理主義」を批判すると次の2つのことが帰結する。

(一)合理主義を合理的に論証できない以上、合理主義の選択は非合理的な決意の結果にはかならないことになる。

(二)非合理主義者の方が、首尾一貫している点で、合理主義者より論理的に優れていることになる。というのは、合理主義者による合理主義の選択には非合理主義の要素があるのに対し、非合理主義者にとって非合理主義の選択は非合理的な選択でかまわないのであるから、一応首尾一貫していることになるからである。

合理主義者は理論を重視するといいいながら、なぜより首尾一貫している非合理主義を選択しないかと問われることになろう。

ポパーの答えはこうである。<sup>(12)</sup>批判的合理主義は、合理主義の選択が非合理的な決定であることを認めることによって、無批判的合理主義のように矛盾には陥っていない。人は、非合理主義も合理主義も選択可能ではあるが、非合理主義を選択する必要はない。われわれは、理性や合理性を信仰すること

ができるのであり、しかも合理主義を選択する方を良しとする道徳上の理由があると。

合理主義の選択が道徳的に根拠づけられるかどうかという問題はさておき、<sup>(13)</sup>ポパーの合理主義擁護の理論は説得力に欠けている。というのは、上述したように、非合理主義の方が合理主義より首尾一貫しており、論理的に優れていることをポパーは認めているからである。

合理主義の選択が、独断的で恣意的な非合理的決定にすぎないという非合理主義の批判的議論に、合理主義者はどう答えたらよいのであろうか。この議論は、合理主義者も非合理主義者と同様、「非合理的な信仰への飛躍」を行っている点で、「お互い様」議論（To Quoque Argument）と呼ばれている。<sup>(14)</sup>合理性に関する理論の展開は、まさにこの問題をめぐってなされているといっても過言ではないのである。

ポパーは、「お互い様」議論が妥当なことを認め、合理主義の採用がまったく非合理的であると、非合理主義者に譲歩する。それに対し、バートリーは、合理主義者はそのような譲歩をする必要はないと主張し、「批判的合理主義」に代わる、「包括的批判的合理主義」（Comprehensively Critical Rationalism）を提唱している。それではバートリーの議論を追究することにしよう。

バートリーは、「合理性」は「正当化」にではなく、「批判」に存するというポパーの基本的見解を発展させて、「合理性」は、批判に対して開かれているもの——言明、基準、哲学的立場などあらゆる見解を含む——のみを受け容れる用意があることに存するという考えを主張し、しかもこの合理性の基準自身も、批判に対して開かれていることになるから、非合理的な前提にコミットする必要はなく、したがって合理的であるという。これが「包括的批判的合理主義」の理論である。

この「包括的批判的合理主義」の理論は、「お互い様」議論を避けることができる。というのは、合理主義者も非合理主義者と同様非合理的な前提にコミットしているというのが「お互い様」議論であるが、「包括的批判的合理主義」では、合理性の基準自身、批判に対して開かれているので、包括的批判的合理主義者は、何の前提にもコミットしていないからである。<sup>(15)</sup>

「包括的批判的合理主義」の理論が提出される以前には、非合理主義者は、

「お互い様」議論によって、合理主義者もいわば「同じ穴のむじな」だと切り返して、非合理主義を合理化することができたのである。いいかえれば、非合理主義者は、合理主義者の非合理性を合理的に批判することによって、自らが非合理主義的ではないこと、すなわち非合理主義者といえども合理的な議論を受け容れていることを証していたのである。非合理主義者が合理主義に対する批判を強めれば強めるほど、自らが合理主義的になるという逆説に直面していたといえよう。非合理主義者も合理性を尊重していたのである。

ところが、「包括的批判的合理主義」の理論によれば、何の前提にもコミットせず、あらゆるものを批判にさらすことが合理的だということになるから、どんな立場にコミットすることも非合理的だということになる。<sup>(16)</sup>したがって、何らかの前提にコミットする非合理主義者は、合理的な自己弁護の余地のない真の非合理主義者になってしまったわけである。

合理主義者と非合理主義者の間に、橋を架けることのできない深淵が生じたともいえよう。合理主義者と非合理主義者の間で、議論のできた以前と比べ、事態はいっそう悪くなったのではないかという疑問が生じるかもしれない。この問題は本稿では取り上げることができないが、ただ1つ、この問題に対する解決のカギが、人間は多かれ少なかれ合理的であり、まったくの合理主義者もまったくの非合理主義者も存在しないというアガシの示唆に存するとだけ指摘しておきたい。

### III. 包括的批判的合理主義批判の検討

この「包括的批判的合理主義」に対して反論がなされている。J. W. N. ワトキンスの「包括的批判的合理主義」(『哲学』誌, 44号, 1969年)がその論文<sup>(17)</sup>である。

1971年、雑誌『哲学』は、「包括的批判的合理主義」をめぐる論争を特集した。掲載された論文は以下の通りである。<sup>(18)</sup>

「理性の根拠」J. アガシ, I. C. ジャーヴィ, トム・セトゥル共著

「ワトキンスの合理主義について」ジョン・ケケス

「合理主義者は自分の合理主義について合理的になりうるか」シェルドン・

リッチモンド

「包括的批判的合理主義の反駁」J. W. N. ワトキンス

さらに、先のJ・アガシら3人は、『社会科学の哲学』誌4号(1974年)に、ワトキンス批判の論文を発表している。<sup>(19)</sup>

「包括的批判的合理主義」をなおいっそう明確にするために、この論争を批判的に検討することにしよう。

論争の核はこうである。「批判に開かれている」見解のみを受け容れることが「合理的」である。という「合理性の基準」そのものが「批判に開かれている」ならば、その「合理性の基準」を受け容れることは「合理的」であり、もし「開かれていない」ならば、「合理的」ではないことになる。バートリーは、彼の「合理性の基準」は「批判に開かれている」と主張し、他方、ワトキンスはそれを否定する。

ワトキンスの批判論文は2つあるので、それを順に考察しよう。<sup>(20)</sup>

(一)ワトキンスは、「包括的批判的合理主義」を次のように批判している。「包括的批判的合理主義」を批判しようとするどんな試みも、それが「批判に開かれている」ことを示す結果になるだけで、どんな批判の試みも失敗することにきまっている。したがって、「包括的批判的合理主義」の立場は、バートリーの意図に反して、〔反証される危険性を排除する装置を理論の中に内蔵するという〕独裁主義的戦略(Dictatorial Strategy)を採用しており、強化された独断主義(Enforced Dogmatism)にならざるをえないと。

この批判は、アガシらの2つの論文で反批判されている。<sup>(21)</sup>「包括的批判的合理主義」が「批判可能」であることが、「包括的批判的合理主義」を受け容れるための十分条件とみなすならば、批判の試みを行なう者は、「批判可能」であることを自ら示すことになるので、「包括的批判的合理主義」を受け容れなければならなくなる。したがって、「包括的批判的合理主義」は独断的といえるであろう。しかし、必要条件とみなすならば、独断的にはならないと。

〔なぜなら、必要条件ならば、「包括的批判的合理主義」の批判に失敗しても、その立場を採用しなければならないという結論はでてこないからである。〕

ワトキンスは、第2論文では、この反批判には答えていない<sup>(22)</sup>ので、アガシらの批判を受け容れたものと思われる。その代わりに、ワトキンスはもっと



強力と思われる別の批判を行っている。

(二)ワトキンスは、「包括的批判的合理主義」が次のジレンマに陥いることを論証しようと試みている。「包括的批判的合理主義」の主張を定式化した言明は、分析的に真なる言明か総合的に偽なる言明のどちらかであると。前者の場合には、〔反証可能性がまったく排除されているので〕強化された独断主義に行き着き、他方、後者の場合には端的に偽であるから、却下しなければならないということになる。

もしこのワトキンスの論証が妥当なら、「包括的批判的合理主義」は成り立たないであろう。

ワトキンスは、この論証を行うために、「包括的批判的合理主義」を彼なりに定式化し、また「批判可能性」の概念および言明の受容、拒否の関係を限定し、さらに真なる総合的言明の存在を仮定している。これらのすべてを認めるならば、ワトキンスの論証は妥当なものとなる。

先ずワトキンスは、バートリーの「批判に対して開かれている」という用語は、心理的、主観的であるから、「客観的な批判可能性」(Objective Criticizability)と取り代えなければならないと提案する。<sup>(23)</sup>この提案は理に適っているといえよう。<sup>(24)</sup>

次に、合理的に受容可能な言明の中に、当然分析的言明も含まれるが、例えば「 $0 \neq 1$ 」は合理的に受容可能だが、真面目な意味で必ずしも批判可能ではないということに彼〔バートリー〕も同意するであろう」として、「包括的批判的合理主義」のテーゼから、分析的言明の批判可能性は排除し、次のように定式化する。

包括的批判的合理主義 (CCR) のテーゼ——「すべての非分析的で合理的に受容可能な言明は批判可能である」

次に客観的に判定可能な批判可能性を、「批判可能性<sub>0</sub>」(Criticizability<sub>0</sub>)と「批判可能性<sub>1</sub>」(Criticizability<sub>1</sub>)として定式化する。

批判可能性<sub>0</sub>——「言明 T が批判可能<sub>0</sub>なのは、自己矛盾的でない言明 C が存在し、C の受容が T の拒否を導く場合である」

批判可能性<sub>1</sub>——「偽であるとは知られていない言明 C が存在し、C の受容が T の拒否を導く場合である」

CCR のテーゼ「すべての非分析的で合理的に受容可能な言明は批判可能である」という言明が、批判可能<sub>0</sub>だと仮定するならば、すべての非分析的言明は自己矛盾ではない否定言明をもっており、その否定言明を受容することは、そのもとの言明を排除することになるので、すべての非分析的な言明は必然的に批判可能<sub>0</sub>である。したがって、「すべての非分析的で合理的に受容可能な言明は批判可能である」という言明が批判可能<sub>0</sub>であることは分析的に真であるということになる。

他方、CCR のテーゼ「すべての非分析的で合理的に受容可能な言明は批判可能である」という言明が批判可能<sub>1</sub>だと仮定するならば、「すべての非分析的で合理的に受容可能な言明は批判可能である」という言明が総合的に偽になるのは、真であると知られている非分析的言明が少なくとも1つ存在する時かつその時に限るということになる。というのは、もし真であると知られている非分析的言明が存在するとなると、その言明は批判可能<sub>1</sub>ではないから、「すべての非分析的で合理的に受容可能な言明は批判可能である」という言明は偽だということになるからである。

そして、ワトキンスは、真であると知られている非分析的言明の例を挙げる。<sup>(25)</sup>

「1984年以前に日本語で書かれた正確に41文字からなる文章が少なくとも1つ存在する」という言明は、この言明を否定しても自己矛盾に陥らないから総合的であり、しかもその言明を数えてみればわかるように確実に真であると主張する。

この最後の主張は妥当であろうか。ポパーの知識論の基本的テーゼとして、真理到達不可能性と真偽の非対称性があるが、この観点からみると、われわれは、ワトキンスの構成した言明が確実に真であるとはいえないのである。われわれは批判的検討——反証の試み——の結果、今のところ偽とはいえないとして言明を暫定的に受け容れるのであって、あらゆる言明は例外なく確実に真かどうかはわからないのである。したがって、批判可能<sub>1</sub>ではない、真であると知られている非分析的言明が少なくとも1つ存在するから、「すべての非分析的で合理的に受容可能な言明は批判可能である」という言明は偽であるというワトキンスの論証は妥当ではない。<sup>(26)</sup>

ワトキンスの反証の試みは成功していないといえよう。したがって、「包括的批判的合理主義」は偽の可能性はあるけれども、今のところまだ反証されていないから、批判に耐えているといえよう。

アガシらは、ワトキンスの「合理的受容可能性」(Rational Acceptability)の概念が、必要条件を十分条件と間違っ受けてられる可能性があるし、また合理主義者は、批判によって誤謬を排除することを目指すのであって、批判に失敗したからといってその言明を受け容れなければならないという必要はないという理由で、「受容可能性」という概念を「維持しうる」(tenable)という概念に取り代えることを提案する。<sup>(27)</sup>

また、「批判不可能であることを発見する以前に、批判不可能な言明を批判することは……不合理ではない。……したがって真なる言明でさえ批判に開かれているとさえ主張できるかもしれない<sup>(28)</sup>」と主張し、「包括的批判的合理主義」の考え方から、「批判不可能だとみなされていたり、知られていたりする見解は合理的に維持しえない」(POC)という言明を導くことができるという。<sup>(29)</sup>

そして「POC 自身が合理的に維持しうるかどうかは、知識のあり方や批判可能性に関する見解に依存している。ワトキンスの挑戦にもかかわらず、われわれは維持しうると考えているが、……包括的批判的合理主義を採用するかどうかは、まだ未解決の問題である<sup>(30)</sup>」と、批判的合理主義者らしい結論を出している。

#### 注

- (1) Popper [CR], p. 21. ポパーは、この説を真理はおのずから顕れるという「真理顕現説」(Theory of Manifest Truth)とも名づけて批判し、「真理は手に入れがたい」と主張する。この主張は、真理を手に入れることの不可能性ではなく、困難さを主張しているものと受けとられるかもしれない。言葉通りに受けとれば、困難さのみを主張しているように思われるが、ポパーの哲学全体からみれば、不可能性の主張と解釈するのが自然である。というのは、後で考察するように、ポパーによれば、自然科学に限っても真と確定できる言明は1つもないからである。また、もし真理を手にすることが困難なだけだとしたら、最終的には真理を手にするができるのだから、それを正当化することもできるはずである。したがって、正当化一

般を否定するポパーとしては、「真理を手にするには困難だが可能である」という主張はできないのである。

- (2) 数学や論理学にも反証主義が適用できることをI. ラカトシュは, *Proof and Refutations*, Cambridge University Press, 1976, で示そうとしたのである。
- (3) Popper [OS], vol. II, p.374.
- (4) *ibid.*, p. 375.
- (5) 量化記号の付加によってもっと複雑な言明が構成されるが、その1つ、 $(\forall x)(\exists y) R(x, y)$ の形の言明の、反証可能性の観点からの分析は、Popper [RAS], pp. 195-211 参照。
- (6) Popper [LSD], pp. 84-86.
- (7) *ibid.*, pp. 94-95.
- (8) *ibid.*, p. 94.
- (9) Popper [PPS], p. 163.
- (10) 本稿を書くにあたって、筆者はバートリーの洞察に恩恵をこうむっている。
- (11) Popper [OS], vol. II. p. 230.
- (12) *ibid.*, pp. 232-247 の議論の要約がこれである。
- (13) ポパーは「科学の、そして合理主義の倫理的基盤はある」(*ibid.*, p. 238) と主張しているが、「理性」なしに倫理的判断ができるであろうか。倫理的根拠を述べようとすることはすでに「理性」や「合理性」をひいきにしているのではないかという疑問が生ずるが、ポパー自身、この問題に気づいている。真理は価値であるが、真理が価値であることは真理かという問題が生じるからである。Popper [IA], p. 155.
- (14) Bartley [RC], pp. 88-95.
- (15) Bartley [RC], pp. 134-175 と Bartley [RTR], pp. 3-44 をまとめたものである。
- (16) 誤解を避けるために一言述べておきたいが、合理主義者はどんな理論や立場も受け容れることができないということではない。まず、われわれは無意識に受け容れている理論があるし、すべての理論や立場を同時に批判することもできないのである。又、批判的検討の結果、現在のところ批判に成功しなかったという理由で暫定的にその理論を受け容れることは非合理ではないのである。非合理的なのは、批判に対して開かれていない理論で受け容れたり、批判に開かれえないものとしてある理論に特権的地位を与え、それを受け容れたりすることである。
- (17) J.W.N. Watkins, *Comprehensively Critical Rationalism*, in *Philosophy*, 44, 1969, pp. 57-62.
- (18) J. Agassi, I.C. Jarvie, Tom Settle, *The Grounds of Reason*, pp. 43-50, J. Kekes, *Watkins on Rationalism*, pp. 51-53, S. Richmond, *Can a Rationalist Be Rational*

About His Rationalism?, pp. 54-55, J.W.N. Watkins, CCR: A Refutation, pp. 56-61, in *Philosophy*, 46, 1971. ケケスは「ワトキンスの〔包括的批判的合理主義の〕反駁が成功しているかどうか確信がもてない」と公言し、しかし「ワトキンスの提案する包括的批判的合理主義に代わる理論は成功していない」として、論文をその批判にあてているが、ここでは取り上げない。ただワトキンスの反駁への疑問がアガシらの主張と同様であることを指摘しておく。リッチモンドは、「合理主義者が自分の合理主義について合理的になれるというのは1つの信念」だとし、ワトキンスとバートリーの主張のどちらが正しいと思われるかについては検証せず、「合理主義について合理的であることが理論的に不可能なら、合理主義者が合理主義について合理的でないのは非合理とはいえず、論理的に可能な場合にのみ、合理主義について合理的でないのは非合理である」という一般論を展開している。またワトキンスは、ケケス、リッチモンドには言及せず、アガシらの論文についてのみ論じている。そして、1974年のアガシらの論文は再度それに答えている。したがって論争をたどるには、アガシらの2論文とワトキンスの2論文を考察すれば十分であろう。

- (19) Tom Settle, I. C. Jarvie, J. Agassi, Towards a Theory of Openness to Criticism, in *Philosophy of Social Sciences*, 4, 1974, pp. 83-90.
- (20) (一)は、Comprehensively Critical Rationalism, (二)は、CCR: A Refutation における議論に対応する。
- (21) The Grounds of Reason, p.44, Towards a Theory of Openness to Criticism, p. 85.
- (22) ワトキンスの第2論文の批判が正しい場合には、第1論文の主張も正しいものになるが、アガシらは第2論文の批判が妥当なものであるとはみていないことを指摘しておく。
- (23) CCR: A Refutation, p. 56.
- (24) Towards a Theory of Openness to Criticism, p. 84. で、アガシらもその必要性を認めている。
- (25) CCR: A Refutation, p. 59.
- (26) ワトキンスの「確実に真なる総合的言明が存在する」という主張は、批判的合理主義を奉じるポパーリアン\*のワトキンスとしては、奇妙な主張である。アガシらは、このワトキンスの主張を具体的には批判していないが、一般論として「科学的知識を考察する知識論は、厳密に言えば、知識とはいえない修正の余地のある知識を考慮しなければならないであろう。われわれは、ワトキンスやバートリーと一致して、このような理論を採用している。したがって、誤っているかもしれないものを人は知っているといえると思う」と述べている。Towards a Theory of Openness

to Criticism, p. 87.

(27) *ibid.*, pp. 86-87.

(28) *ibid.*, p. 87.

(29) *ibid.*, p. 87.

(30) *ibid.*, p. 87.

\* オクスフォード英語辞典 (O.E.D.) 3 巻, 追加項目には, ポパーリアンという項目が載っている。それによると, 「ポパーリアン, 名詞および形容詞。哲学者, サー・カール・ライムント・ポパー (1902 年生まれ) の名前にイアンを付加したもの。A. 名詞, ポパーの理論や方法を唱える人。B. 形容詞, ポパーの理論や方法に従っている状態」となっている。

#### 文献略記表

Bartley [RC]: *The Retreat to Commitment*, Chatto & Windus, London, 1964.

Bartley [RTR]: Rationality versus the Theory of Rationality, in *The Critical Approach to Science and Philosophy*, The Free Press, New York, 1964, pp. 3-44.

Popper [OS]: *The Open Society and Its Enemies*, Routledge & Kegan Paul, London, 1973, (1st ed., 1945)

Popper [LSD]: *The Logic of Scientific Discovery*, Hutchinson, London, 1975, (1st ed. 1959)

Popper [CR]: *Conjectures and Refutations*, Routledge & Kegan Paul, London, 1974, (1st ed., 1963)

Popper [PPS]: Is there an epistemological problem of perception?, in *Problems in the Philosophy of Science*, ed. by I. Lakatos and A. Musgrave, North-Holland, Amsterdam, 1968.

Popper [IA]: Intellectual Autobiography, in *The Philosophy of Karl Popper*, ed. by Paul Arthur Schilpp, Open Court, Illinois, 1974.

Popper [RAS]: *Realism and the Aim of Science*, ed. by W.W. Bartley, III, Hutchinson, London, 1983.